

鶴林寺のおこりについての伝説は、以前紹介しましたが、実際はいつごろ建てられたものなののでしょうか。

兵庫県史では、その時期を平安時代後期と推測しています。播磨地方の有名な豪族が建てたらしいのです。

鶴林寺の建築の中では、太子堂（こくほう）が平安時代後期のものと考えられます。

頂上の小さく美しい宝珠（ほうじゅ）流れるように美しくゆったりとした屋根の線、そして簡素（かんそ）なつくりなどは、寝殿造（しんでんづくり）を思わせます。

その内部には、鎌倉時代から、聖徳太子像がまつられているため、「太子像」とよばれています。もともとは、釈迦三尊像（しゃかさんぞんぞう）と四天王像（してんのうぞう）がまつられていました。

昭和51年2月、赤外線撮影によって、この太子像の真っ黒なすすにおおわれた壁や柱の下から、極彩色（ごくさいしき）の壁画（へきが）が発見されました。これらはどれも流れるような美しい線でえがかれており、当時の一流絵師（えし）によるものといわれています。

加古川市中学校社会科研究会編より